

# 学校 × 医療 × 行政

目指すは学校での突然死ゼロ、社会復帰率 100%。  
突然死から子どもの命を守るため、3者が手を取り合った



心臓の収縮が終わりかけた一瞬のタイミングに、胸にボールが当たるなどして衝撃が加わると、健康な人でも突然心停止することがある。



AEDによる電気ショックが1分遅れるごとに、救命率は約10%ずつ低下。心停止から5分経つと50%、10分経つとほとんど助からない。



救急車が到着するまでの時間は、市内平均で約7分。現場に居合わせた人が、胸骨圧迫とAEDで命を繋げることが鍵となる。



▲訓練で使ったアクションカード  
AEDの手配や119番通報、周囲の児童の保護など、役割ごとにやるべきことが書かれている。

**救命の鍵は「現場」にあり**  
心停止が起こり、救急車が到着するまでの間、現場には救急隊も医師もいない。居合わせた人が、命を救う鍵となる。  
特に重要なのが、AEDを早く、正しく使えることだ。救急車到着まで何もしなければ、1か月後の生存率は約8%に留まってしまいが、胸骨圧迫をすることにより約15%、AEDで電気ショックを与えることにより約54%の人命が助かっている。(※)さらに、電

気ショックが早ければ早いほど、助かる確率は上がる。教職員向けの研修では、AEDの重要性が強調され、「校内のどこで心停止が起きてても、2分以内に持つて来られる場所に設置する」よう呼びかけられた。「あるだけ」ではなく「使える」ようにすることが、救命の第一歩となる。

**3者で「やってみる」**  
プロジェクトでは、心停止発生から救急搬送までのシミュレーション訓練を実施。学校でどのような訓練ができるか、また、どのような訓練をすればより効果的か、3者が協議を重ね、訓練に挑んだ。北吉井小学校での訓練では、愛媛大学医学部の学生も児童役として協力。クラスメイトが倒れた姿を見た児童、生徒がパニックになったり、過呼吸を起したりと「リアルな状況」を作り出した。

最初の訓練では、「慣れない状況ではきちんと指示が出せない」という課題を発見。そこで、緊急時の対応に抜けがないよう、やるべきことをまとめたマニュアル「アクションカード」を地域モデル校の教職員が独自に作成し、以降の訓練で活用した。訓練を経て、教職員からは「アクションカードのおかげできちんと対応できた。カードにない想定外の事態や、周りの子どもたちのケアなども突き詰めていきたい」という声

※総務省消防庁 令和7年版救急救助の現況より

# 子どもの突然死を防ぐ



さつきまで元気だったのに――。

令和6年度、全国の学校で起きた子どもの突然死は13件(※)。中でも特に多いのが、心停止による突然死だ。AED(自動体外式除細動器)の普及により年々減少してきているが、それでもなお、尊い命が失われ続けている。  
心停止がいつどこで起きてても、居合わせた人が正しく動くことで命を救えるように、そして、元気に笑っていた日常に戻れるように――。

志を共にした学校、医療、行政が手を取り合い、「とうおんハート救命プロジェクト」を立ち上げた。  
学校での子どもの突然死を防ぐために始まったこのプロジェクト。地域モデル校として手を挙げた重信中学校及び北吉井小学校が、愛媛大学及び市消防と3者で連携し、昨年4月から2年間の期間として、学校での研修会や心肺蘇生訓練などを積み重ねている。  
プロジェクトは、教職員向けの研修を皮切りにスタート。研修で愛媛大学医学系研究科の檜垣高史教授(3ページ写真左上)がまず伝えたのは、「心停止は誰にでも起こり得る」ということだ。  
心停止の多くは、心臓が小刻みに震え、血液を送り出せない「心室細動」となることで起こる。その原因はさまざまであるが、発見されていなかった持病や、ボールが胸に当たった衝撃によって起こる心臓震盪など、その多くは予測ができない。

とうおんハート救命プロジェクト、始動

# 119番 × AED × 胸骨圧迫

目の前で人が倒れたら、あなたはどのようにしますか？  
どのような行動を取ればいいのか、知っておきましょう。

## 1 反応がなければ 119番通報とAED手配

優しく叩きながら呼びかける。反応がなければ周囲の協力を求め、救急車を呼び、AEDを手配する。

「大丈夫ですか！」



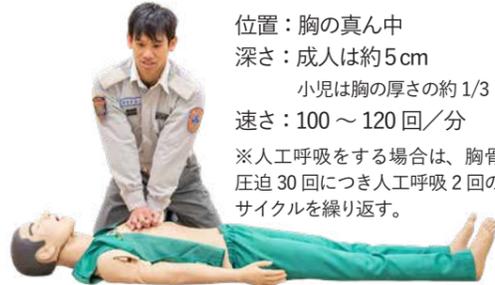
## 2 呼吸を確認

10秒間、胸と腹部の動きを見て確認。呼吸がない、しゃくりあげる、いびきのような呼吸は、心停止の可能性が高い。



## 3 胸骨圧迫

強く、速く、絶え間なく。圧迫の合間は、胸がしっかり戻るまで十分力を抜く。



位置：胸の真ん中  
深さ：成人は約5cm  
小児は胸の厚さの約1/3  
速さ：100～120回/分  
※人工呼吸をする場合は、胸骨圧迫30回につき人工呼吸2回のサイクルを繰り返す。

## 4 AEDの電源を入れて パッドを貼る

AEDの音声に従って胸にパッドを貼り付ける。※下着をずらすなどして直接素肌にパッドが貼り付けられれば、衣服を全て脱がす必要はない。

「心臓マッサージはなるべく止めない」



## 5 電気ショックが 必要なAEDが解析

AEDが心電図を解析し、「ショックが必要です」などの音声が出る。ショック不要の場合は③へ。



## 6 電気ショック

傷病者に触れないよう周囲に呼びかけ、音声に従ってショックボタンを押す。  
※AEDによっては、自動でショックが行われる。



救急車到着まで継続する。

# 知識 × 勇気 × 行動力

知識を身に付け、勇気を持って行動すれば、誰もが「守られる側」から「守る側」になれる。

### 生徒も「守る側」に

学校における心停止の第一発見者は、生徒や児童の可能性が高い。誰もが「守る側」の力を身につけるため、重信中学校では生徒向けの心肺蘇生訓練を行った。訓練では、新潟県で心肺蘇生法を広める「新潟PUSHプロジェクト」の代表で、新潟大学大学院歯学総合研究科の高橋昌教授が講師として指導。「胸をPUSH」、「AEDのボタンをPUSH」、「あ

なた自身をPUSH」をポイントに、子どもでも簡単に学べる心肺蘇生訓練を実践した。地域モデル校の中心となつてプロジェクトに携わつた重信中学校の松永先生は、「学習指導要領の中で、中学校教育においては、『実習を通して』心肺蘇生法を身につけることが求められています。今回の訓練を通して、中学生のうちに心肺蘇生法を学んで社会に出ることで、誰もが救命技術を身に付けているのが当たり

前の社会になって欲しいと改めて感じました」と語つた。学校、そして社会全体において、子どもたちの力は大きな財産となるだろう。高まつた「現場」の力プロジェクトに携わつた市消防の二神消防士は、早速成果を実感する場面があつたという。「訓練後、各地域モデル校から119番通報を受ける事態が発生しましたが、現場の先生たちの対応は完璧でした。学校

と消防の連携も、よりスムーズになつたと感じます」と話す。プロジェクトを通して身につけた知識、勇気、行動力は着実に現場の力となつている。「突然死から子どもの命を守りたい」。立場は違えど、同じ思いを胸に手を取り合つた3者のプロジェクトは、来年度も続く。今後は、プロジェクトを他の学校や地域全体に波及させ、子どもの突然死ゼロ、社会復帰率100%を叶えるため、一歩ずつ着実に歩いていく。

### 学校でのシミュレーション訓練



授業中に運動場で児童が倒れた想定で訓練。本番さながらの緊張感が流れる中、救急車が来るまでの対応を行った。



運動場で児童が倒れたそのとき、職員室は対策本部に。状況の整理や、役割分担の確認、現場の応援、保護者への連絡などを行った。

### 生徒向け心肺蘇生訓練



「新潟PUSHプロジェクト」代表の高橋教授（写真左）が指導し、「45分で学べる」心肺蘇生訓練を実践。

目の前で人が倒れたとき  
「命を救えるのは“あなた”だけ！」

まず行動する勇気を  
目の前で人が倒れたとき、何よりも大事なことは、勇気を持って行動することです。どうしていいかわからないときは、119番通報をしてください。電話口からサポートします。  
心肺蘇生法は、忘れないうちにも訓練することが大切です。機会があれば地域の訓練などに積極的に参加しましょう。

### まず行動する勇気を



市消防署 神野 和也 署長